12

後赤壁之図　森寛斎　一幅

紙本墨画淡彩
明治二十三年（一八九〇）
本紙一七二・七×九〇・〇

森寛斎（一八一四～九四）は、長門国（山口県）に生まれ、二十五歳（一説には二十二歳）に京都の森徹山の門に入って円山派の画風をならい、後に養子となった。幕末の動乱期に尊皇攘夷派として活動していたことは有名であるが、その時に深い絆を結んだ品川弥二郎らとは、その後作画活動を再開しても親交が続いた。維新後は京都の画家たちが集った如雲社に参加し、会の創立メンバーであった塩川文麟没後には団体の中心的存在となった。寛斎は、写実性を追い求めてばかりでは円山派は俗に流れるとして、応挙の画風に南宗の気韻を加えるべく模索を続けた。また野村文挙や山元春挙といった弟子を育てた功績も大きい。

本図は、明治二十三年（一八九〇）の日本美術協会絵画展覧会に出品され、銀牌および特別賞を受賞した作品である。画題となるのは、中国北宋の詩人蘇東坡が二度にわたって赤壁の地（中国湖北省）を訪れた時の感慨を詠った「赤壁賦（前赤壁・後赤壁）」である。断崖絶壁の赤壁を船上から見上げる蘇東坡一行を描いた赤壁図は、日本では江戸時代中期以降、南画家を中心に好んで描かれた。寛斎は岩山を立体的に描写する応挙の山水表現を受け継ぎながら、にじみや擦れなど筆に表情をつけることで画面の詩的雰囲気を高め、冬の月夜の静寂に満ちた名勝を表現している。寛斎七十七歳の作品であり、生涯描き続けた山水図のひとつの到達点とも言えよう。本図は展覧会終了後に品川弥二郎に贈呈され、品川から献上された。そして寛斎は、本図を描き上げたこの年に設置された帝室技芸員に田崎草雲、柴田是真、狩野永悳とともに初めて任命された。

・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

描き継ぐ日本美 ―円山派の伝統と発展
三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 59

編集　宮内庁三の丸尚蔵館
制作　株式会社 東京美術
翻訳　横溝廣子
発行　宮内庁
平成二十四年九月十五日発行

© 2012, The Museum of the Imperial Collections